

日本フランス語フランス文学会

cahier

09

mars 2012

I 2011 年度秋季大会ワークショップ

- 1 フランス・ルネサンス期の文学に見る暴力の表象
久保田剛史 平野隆文 濱田明 1
- 2 オラルヒストリーの「事実」と「真実」
高橋純 島村輝 高橋信良 4
- 3 科学としての言語学が斬り捨てた問い
—— 言語科学の哲学に向けて ——
酒井智宏 山口裕之 守田貴弘 8

II 書評

- 髭郁彦他編著『フランス語学小事典』
鈴木隆芳 12
- Yumi TAKAGAKI (高垣由美), *De la rhétorique contrastive à la linguistique textuelle : l'organisation textuelle du français et du japonais*
阿部宏 14
- 村田京子『女がペンを執る時 19世紀フランス・女性職業作家の誕生』
高岡尚子 16
- バンジャマン・コンスタン (高藤冬武訳)『バンジャマン・コンスタン日記』
倉方健作 18
- 牛場暁夫『『失われた時を求めて』交響する小説』
小黒昌文 20
- 郷原佳以『文学のミニマル・イメージ モーリス・ブランショ論』
門間広明 22

2011年度秋季大会ワークショップ

ワークショップ1

フランス・ルネサンス期の文学に見る暴力の表象

コーディネーター（兼パネリスト）：久保田剛史（青山学院大学）

パネリスト：平野隆文（立教大学）、濱田明（熊本大学）

ルネサンス期のフランスは、イタリア戦争あるいは宗教戦争という凄惨な内乱に象徴されるように、暴力がその平均的な識閥を越える異常な戦乱の時代であった。さらに、異端審問、魔女狩り、新大陸での破壊行為など、広義の欧州圏に於いて、「異質」の排除を目指す暴力行為が猖獗を極めた。しかしながら、当時の文学作品は、暴力の表象の次元で把握した場合、各時期の政治的・宗教的な背景を変数として、多様な展開を見せる。本ワークショップは、ルネサンス前期の、蛮行の実質をゼロ度にまで無化する芸術の至芸（ラブレール）に発し、世紀後半に多出する、残虐性の発露を様々なプリズムを通して変容させる詩作品（ロンサル、ドービニエ）を経て、古典からの引用により、暴力行為を「人間のありよう」という濾過器を通して往還的に把握する作法（モンテーニュ）に至るまでの、多様な表象法を辿る試みである。

(1)

平野は、16世紀前半と後半の暴力の表象を、大まかに比較対照した。コーパスの選択には、かなりの恣意性が残るが、前半の代表例としては、暴力の虚構化とその内実の剥奪に寄与したラブレールの前期作品と、暴力的状況を福音主義の磁場に引き込み、蛮行を神学化により昇華した『エプタメロン』を紹介した。一方、後者の代表例としては、版画、散文、韻文の3ジャンルを交錯させて、新教徒の暴力と聖餐論との結節点を抽出するヴェルステガンの『残酷劇場』、逆に、実体変化論をスカトロロジーと連結させて嘲笑し、カトリックによる「神食（テオファジー）」の無意味性を暴き出したドービニエやテオドル・ド・ペーズの小品群、さらには、カンニバルの暴力の把握法が、聖体拝領を巡る想像界に無意識裡に引き込まれていることを暗示している、テヴェおよびレリーの「旅行記」を分析した。

平野に言わせれば、ラブレール『ガルガンチュア』内のピコロコル戦争での暴力描写は、解剖学的知見の列挙やナンセンスな死に方の強調により、血生臭さを消去され、滑稽な人形劇へと「変換」を被っているという。スクリーチの言葉を借りれば、兵士たちは徹底的な「非人間化＝機械化」を施され、恰も子供の遊びに使われる怪獣の人形と、寸分違わぬフィクション性を獲得している。更に、トルコ人の捕虜として焼肉の串で炙られるという逸話で幕を開く『パンタグリユエル』第14章は、聖人伝のパロディーの枠内で展開し、パニユルジュがパシヤを惨殺しトルコの町を焼き払うという壮絶な暴力の描写に満ちているが、これは、ジェラルール・ドゥフォーに依拠するならば、パニユルジュ＝オデュッセウスという大法螺吹き系の系譜上で大炎上している嘘八百であり、濃密な虚構内虚構の仕掛けを通して、その残酷さは完全に脱臼されていることになる。他方、『エプタメロン』第1日第1話の「プロローグ」は、大洪水の中、山頂のノートルダム・ド・セランス寺院に、山中の種々の危険を克服して辿り着いた「語り部」十名を紹介するが、ここには既に救霊予定説を予感させるような選別意識と、困難な信仰の道を辿る神学的試練が重ねられている。作品中の強姦、殺人、近親相姦なども、「エロ・グロ」の表層が、福音的神学の教義という深層に支えられながら、神学化されたロマネスクとして展開するという。

世紀後半のヴェルスステガン『世界劇場』は、腹部切開という、新教徒による儀礼的拷問への執着を描く。ここには、キリストの血の犠牲の唯一性・一回性を無化するミサの「欺瞞」を、新教側が暴露せんとする思惑が、囃らずも暗示されている。この嘲笑は、すぐさま肉体的下層へと転落し、ド・ベーズやドービニエら新教徒によるスカトロジックなジョークを引き出す。ミサで摂取されたイエスの血と肉とが、翌朝には純粋な(?)糞便として排泄される身体機能に着目し、「神を食らう者＝旧教徒」が「食られる神＝聖体」を決して同化吸収できない実態を、人糞の具体的な感触と直結させて暴き出そうとする。

また、聖餐の儀式が暴力描写を規定する様相は、テヴェヤド・レリーの「旅行記」でも反復されるという。食人行為に内在する共同性（誰もが敵の身体の一部を「拝領する」）の指摘は、カトリック共同体の絶えざる再生を目論むミサの儀式を前提にして初めて、認識可能な所作だからである。

(2)

濱田は、ロンサールの『論説詩集』に収められた作品数編とドービニエの『悲愴曲』を取り上げ、宗教戦争を背景に綴られた詩を解析し、そこに感知される暴力の表象ないしはその不在について、独自の知見を披瀝した。

濱田によれば、最初に発表された「当代の惨禍を論ず」では、国の荒廃を惹起しつつある内乱を嘆きながらも、ロンサールは、カトリーヌ・ド・メディシ

スに「直訴」する宮廷詩人という愛国的な立場を採り、暴力の主体としてのプロテスタントを難詰する姿勢は未だ打ち出していないという。ところが、「続・当代の惨禍を論ず」、「フランス国民への訓戒」では、詩人はプロテスタントへの批判を先鋭化し、その際、彼らによる偶像破壊を許し難い蛮行として非難している。しかし、宗教戦争の暴力を直接体験したロンサールが、「どうにも耐え難い」事態として読者に訴えるのは、プロテスタントによる暴力の行使そのものよりも、むしろ、彼らの欺瞞に満ちた言説の蔓延であり、詩人はその悲観的状况に照準を合わせ、それを言葉による暴力の発現として把握している可能性が高いという。第一次宗教戦争と並行しつつ刊行された『論説詩集』を構成する一連の作品群で、宗教戦争における蛮行への言及が見られるのは、言わば当然の帰結であるが、濱田によれば、より興味深いのは、暴力行為を巡る詩人ロンサールの語り口の変化だという。

一方プロテスタントの軍人として、戦場を駆け抜け、一生を新教のために捧げたドービニエにとって、暴力は、彼の歴史家、風刺作家、詩人としての言説を織り上げる上で、切迫した内実として把握されている。濱田は、特に『悲愴曲』において、異端審問、聖バルテルミーの虐殺など、プロテスタント撲滅を目指したカトリックの暴力を、迫真的に描出していると指摘する。暴力の表象において、ドービニエは、拷問者と殉教者、加害者と被害者の関係が、明確に対照を成す構図を選んでいいる。また、切り刻まれる身体や血みどろの修羅場の描写は、ロンサールの詩句に比べて、はるかに濃密な具体性や描写性を獲得しているという。しかし、地上の虐殺の光景を、天使による反回転の描写技法を適用しつつ無化した上で、神に倒立的に開示して見せる「天上画」という手法を、武人＝詩人は駆使しており、ゆえに暴力行為の描写自体を、最終的な目的として定位することはない。その大部分が宗教戦争終結後に綴られた『悲愴曲』は、内戦中に理不尽な迫害を受けたプロテスタントが、最後の審判における主客逆転を経て、最終的に栄冠を手中にする構成を採るといいう。濱田はさらに、カトリックの暴力が超越論的に克服され、受けた暴力に比例するかの如く新教徒の救済が増幅される、ある種の関数的表象に注意を喚起し、ゆえに、この作品において、敵方の暴力は味方の最終的勝利を担保する上で、逆説的な重要性を帯びている、と指摘する。

(3)

久保田は、モンテーニュが『エッセー』で展開する暴力描出の特殊な技法、およびその描写と裏腹の関係にある暴力批判の位相について考察を行なった。

久保田は先ず、バロック期と称される16世紀後半のフランス文学において、宗教戦争による国家の惨状が、しばしば「病い」というメタファーを経由して

語られている点に着目する。この「隠喩としての病い」は、宗教戦争の激化と共に、文学作品のみならず、新旧両陣営によるプロパガンダや誹謗中傷文書でも、紋切り型のトボスの一つとして定着してゆく。内戦によって荒廃するフランスは、『エッセー』においても病体に喩えられているが、モンテーニュの独自性は、その修辭的描写を通して内乱の原因を「病理学的」に解明する筆法にあるという。そこで久保田は、二つの章（「顔つきについて」「空しさについて」）から例を引いた上で、モンテーニュが、負傷し腐敗する身体というイメージを、国家としてのフランスに重ね合わせ、内戦の悲劇を「肉感的」に把握すると同時に、戦争の背景に潜む、社会全体のモラルの退廃にも非難の照準を絞っていると指摘する。

さらに、モンテーニュによる宗教戦争への言及や批判の「間接性」にも着目すべきだという。『エッセー』では、内乱期のフランスで反復された暴挙が詳細に語られることはない。しかし、殉死や強姦、拷問、人肉食をはじめとする、古代や中世に繰り返された惨劇の描出は鮮烈である。この過去の暴状のパノラマを、宗教戦争中に為された暴力行為の、一種の予兆的代替として読むことも可能だろう。また、『エッセー』には、古代人の「範例」を通して、現代人を暗示的に批判していると思しき例が少なからず見られる。久保田はその「立証テキスト」として、エパメイノンダスとユリアヌスという二人の英雄に関する逸話を『エッセー』から引用する。彼らの寛仁な態度や寛大な宗教政策に、『エッセー』は大いなる賛意と共感を表すが、その讃仰の背後には、迂回路を経て非暴力主義を支持（かつ指示）するモンテーニュの戦略性が看取できるという。

久保田は、モンテーニュが、宗教戦争に於ける「現代」の個別的惨劇を、古典古代の「普遍」から孤立させる直截的手法を選択しなかったと主張する。それよりもむしろ、普遍的な「人間のありよう *humaine condition*」を媒介させ、古今が互いに呼応し共振し合う超時代的な視点を基軸に据えて、「現代」の惨状の実態とその意味を紡ぎ出したとする。

ワークショップ2

オラルヒストリーの「事実」と「真実」

コーディネーター（兼パネリスト）：高橋純（小樽商科大学）

パネリスト：島村輝（フェリス女学院大学）、高橋信良（千葉大学）

本ワークショップでは通常歴史研究において用いられる「オラルヒストリー」

という言葉で、回想録やエッセーや物語といったジャンルの違いを超えて、一人称の語りと言説全般をくくることとした。その理由は、このように一人称の言説を位置付けることによって、その言説を閉ざされた意味の空間として捉えるのではなく、その言説を生み出した実在の作者（語り手／書き手）が生きた現実世界とオーバーラップさせてその言説を読み直す可能性と必要性が明らかになると考えるからである。つまりこれは読解という行為の在り方を問い直す作業である。そして3件の事例報告がなされた。①言説それ自体は語り手の記憶違いを暴露しているが、背後に別の真実が潜んでいるケース、②語り手が伝えようとしているものが客観的な事実の継起との一致・不一致を超越するケース、③虚構（小説）として提示された一人称言説がいかんにして「オラルヒストリー」として読まれるかが問題視されるケース、であった。

①ロマン・ロランは多喜二虐殺抗議文を書かなかった

高橋純

1933年2月20日に小林多喜二が日本警察権力の手で拷問虐殺されたことを知ったロマン・ロランが抗議文を書き、これがフランス共産党機関紙『ユマニテ』に掲載されたという、戦後日本で語り継がれた逸話の出所を高田博厚の回想録『分水嶺』と特定し、高田が自分の証言が歴史的事実と矛盾することを知りながらその記述を削除しなかったこだわりの背景を1932年の史実を掘り起こすことによって明らかにした。そして、ロマン・ロランは多喜二虐殺抗議文を書くことはなかったが、実は高田の依頼を受け、日共中央委によって1932年7月20日付けで世界プロレタリアートに向けて発せられた抗議文を『ユマニテ』紙に掲載する仲介役を果たしていたことを実証した（ロランが仲介した日共中央委の抗議文は1932年9月29日版『ユマニテ』に掲載された）。このことは、加藤周一、中村雄二郎、粟津則雄の諸氏が過去に『分水嶺』について好意的に語りながらも、高田自身が認めるこの歴然たる記憶違いには一切触れることなく、つまりはその誤りの背後にある真実が明かされなかったために、高田の人格は誤解され、このエピソードの真相は誰にも気付かれずに時が経過したのだった。日本では1932年春にプロレタリア文化連盟（コップ）に対する苛烈な弾圧が開始され、そのために多喜二は地下潜伏し、翌年2月に虐殺された。時系列を順に辿れば、この弾圧が帰結した多喜二虐殺まではおよそ10カ月の隔りがあるが、戦後帰国した高田が40年超の後に歴史を遡及的に顧みたとき、多喜二虐殺と、（その約5カ月前であるが）日本の коммуニストの運命を憂えるロマン・ロランが高田の願いを聞き入れてとった行動が、高田の記憶の中では同一時点での出来事として融合していたことを聴衆は納得できたはずである。つまり高田が自分の記憶違いを知りながら「ロマン・ロランが多喜二虐殺抗議

文を書いた」というエピソードを削除しなかったのは、この偽の情報が、にもかかわらず隠された別の真実を告げていることを確信していたからこそであったのだ。

②アルトーはタラウマラ族を訪問したのか？

高橋信良

1936年、アルトーがメキシコへ渡った当時、タラウマラ族が住むシエラ・マドレ山脈へは、チワワから馬に乗って行くしかなかった。また、メキシコ・シティからチワワまでは1000キロ以上の距離があり、列車を利用して、移動にはかなりの時間が掛かったはずである。しかも、アルトーがメキシコ・シティを出発したのは8月末。容赦なく照りつける太陽と麻薬の禁断症状によって体力を奪われた彼はひとりでは馬にも乗れなかったようである。公的な人類学調査団の一員としてタラウマラ族を訪問したことになっているアルトーだが、公文書館には調査団の記録すらない（ル・クレジオの調査による）。

それではお供はいなかったのか？ のちに彼が言及したお供は「混血のガイド」ひとり、通訳も兼ねていたらしい（「タラウマラ族におけるペヨトルの儀式」参照）。スペイン語すら話せなかったアルトーはもちろんタラウマラ族の言語も解さなかったはずだが、その当時、先住民の言語を直接フランス語に通訳できるガイドがいたのだろうか？ つぎつぎと出てくる素朴な疑問。それらが連鎖反応を起こし、ついには核心を突いた疑問が出てくることになる。それが「本当にタラウマラ族の村まで行ったのか、何を見て、何と出会ったのか、怪しく思える」（「呪縛された人」というル・クレジオの疑問である。メキシコで先住民の調査を繰り返し行い、現地の事情に詳しいル・クレジオの疑問だけに、無視することはできない。それでは、『タラウマラ』に書かれていることはすべてフィクションなのか？ このようにあえて問いたくなるのは、アルトーの『タラウマラ』を詳細な紀行文とみなす読み方があり、それがル・クレジオの疑念の下地となっているからである。

アルトーの死後に刊行された『タラウマラ』は時期が異なる複数のテキストと書簡で構成されたもので、そのうち、タラウマラ族訪問中に書かれたものは「記号の山」とメキシコの『エル・ナショナル』紙に発表された3本のテキストだけである。しかも、『タラウマラ』の冒頭を飾るのは訪問から7年後に書かれた「タラウマラ族におけるペヨトルの儀式」であり、掲載順はアルトー自身の指示によるらしい。アルトーは、これらのテキストの中で、ペヨトルの儀式も含め、タラウマラ体験を詳述する一方、山岳地帯の風景の中に見た東方の三博士の出現など、さまざまな想像を膨らませている。そして、書簡では、その想像が「作り話ではない」と言いつつも「結局、人はこのような出会いから

自分の望む結論を引き出せばよいのであって、東方の三博士が遠回りしてメキシコの無人の山々を通して祖国に帰ったと信じることが重要なのではない」と含みのある言い方をする。まるで、真実は現実と想像のどちらにもないかのように。作品としての文章に作品外の文章（書簡）を組み込んだとき、すでにアルトーは事実か否かという問いの彼方にいたのかもかもしれない。

③『党生活者』論の展開——平野謙から井上ひさしまで

島村輝

小林多喜二が在学中の1923年9月1日に、関東大地震が発生した。その後の混乱の中で、朝鮮人ばかりではなく社会主義者の虐殺も行われた。同年11月17、18日には、小樽高商伝統の「外国語劇大会」が、「関東大震災義捐」というタイトルを冠して開かれた。フランス語劇はメーテルリンクの「青い鳥」。この上演経験を素材に、多喜二は「ある役割」という短編を、小樽高商の『校友会々誌』（1924年3月）に発表した。この作品は現在、講談社文芸文庫『老いた体操教師／瀧子其他——小林多喜二初期作品集』に収録されている。

この小説の語り構造を分析してみると、そこには三つの層があることがわかる。①『党生活者』の「主人公／語り手」である「佐々木安治」の「オラルヒストリー」、②地下活動中の作家「小林多喜二」自身の「オラルヒストリー」、③多喜二死後、「生者たち」の言説の交錯と蓄積としての「オラルヒストリー」がそれである。

従来の『党生活者』論にあつては、多喜二虐殺後、残された「生者たち」の言説、すなわち③の部分が、文学史上に残る論争として記録されることになってきた。多喜二研究のどの場面においても、『党生活者』という作品と、小林多喜二という作家、そしてプロレタリア文学運動の在り方といった話題が、論者の当事者性を直接に反映するかたちで、論争的な文脈において展開されてきたといえるだろう。

しかし最近の多喜二についての実証研究や語りの構造論からする研究の進展などによって、その枠組みは次第に改変されてきた。これまで①「権力の暴虐に対し、命を捨てて抵抗した不屈の闘士、英雄」か、②「政治目的の実行のためには、身近な人の犠牲に全く意を用いない非人間的な性格の持ち主」か、という二項対立的な見方の枠組みを超えるものとして、③「高等教育を受けて、エリートとして銀行に就職しながらマルクス主義文学に進んだ良心的モダニスト知識人」という像が提起されるようになり、それが受け入れられていくプロセスが進行してきた。

2009年秋に上演された井上ひさしの戯曲『組曲虐殺』は、そうした論をさらに乗り越える形で、④「彼をつけまわす特高刑事をも感化するほどの、深い共

感の対象となる人間」という多喜二像を提出した。既存の多喜二論から深く学ぶとともに、それぞれが持つ一面性や解釈の欠陥を乗り越えたこの作品は、まさに現代における井上ひさし版「党生活者」であり、『『党生活者』論』となった。またそれはこれまで積み重ねられてきた多喜二の人間性再発見への集団的考察の、現時点での集大成とも位置付けられるものとして、社会的にも大きな役割を果たす出来事となった（島村輝「組曲虐殺」——あとにつづくものを信じて走れ』『国文学 解釈と鑑賞』、ぎょうせい、2011年2月）。

実在の個人の署名が付されていない一人称の言説はフィクションと区別されない。そしてひとたび言語化されたとき、その署名自体がフィクションと化す運命にあるとしても、言語というフィクションの「外部」にいる（いた）はずの実在の個人は歴史を超越することはない。するとわれわれ読者は同一の一人称言説の中に、体験の報告者の声と意味の創造者の声とを聞き分けられる理屈となる。したがってあらゆる言説が、それが生み出された歴史的な文脈の中に正しく位置づけられるとき、その言説の語り手（書き手）が経験した「事実」と認識した「真実」を対比し続ける指標として存在するものとなり、その間の隔たりを正確に測量することが新たな、そして本当のレクチャーの課題となるはずである。

ワークショップ3

科学としての言語学が斬り捨てた問い —— 言語科学の哲学に向けて ——

コーディネーター（兼パネリスト）：酒井智宏（跡見学園女子大学）

パネリスト：山口裕之（徳島大学）、守田貴弘（東京大学）

チョムスキー以来、言語学の教科書は、いささか誇らしげに、言語学とは人間の心を研究する科学、すなわち認知科学であると謳ってきた。だが、言語学者の研究実践はこのかけ声に見合ったものとなっているだろうか。「認知」「科学」という用語が単なる免罪符に成り下がってはいないか。こうした問題意識のもと、守田と酒井が言語学の内側の視点から現在の言語学が抱える困難を指摘し、山口が言語学の外側の視点からそれらに関する哲学的な検討を行った。

分類の戯れ、言語学の目的

守田貴弘

本発表の目的は、言語研究で行われている分類という行為の様相を検討することで、言語学での分類がどうあるべきで、何に分類の根拠を求めるべきなのか考察することである。一般的に分類は人為分類と自然分類に大別されるが、言語学が自然科学であれば自然分類を目指すべきであり、自然分類であるならば、対象に一定の操作を加え、結果として観察される対象の振舞いによって分類は行われるべきである。言語学には品詞から言語の類型まで数多くの分類が設定されているが、これらは果たして自然分類たるべき条件を満たしているのだろうか。

たとえば、コーパス言語学などでは、語彙数を数えるために伝統的な屈折接辞と派生接辞の区別を無視し、同じ語根が単語の中に観察されれば一つの語彙として扱うといった方法がとられることがある。このような語の扱いは、技術的な問題を差し引いても方法論の実用性に根差した人為分類であり、言語本来の姿を映すものとは考えにくい。また、「○○という動詞には△個の用法がある」といったタイプの研究では、なぜそのように用法が分けられなければならないのか、分類の動機そのものを共有することが難しく、したがって恣意的な用法分類になってしまう傾向がある。さらに、移動動詞や状態変化動詞、心理動詞といった分析対象の設定にあたっては、典型的だと考えられる例が扱われるケースがほとんどであり、ある動詞を当該カテゴリに分類する上での操作可能な分類基準は提示されないことが多い。移動動詞の分類などでは、アスペクトによって下位分類を立てることは可能であるが、従来から行われているアスペクトによる動詞分類との違いは判然とせず、より上位の問題として「そもそも、なぜ移動や状態変化といった個別事象を抽出して研究しなければならないのか」という根源的な問いに立ち返る必要が出てくる。つまり、移動動詞や心理動詞、知覚動詞といったカテゴリを立てることにどの程度の普遍性があるのかという問いである。

分類は研究対象の純粋に自然な姿を反映するものではなく、研究目的を介して観察者のもとに立ち現れる。したがって、言語学における分類の妥当性、分類を支える根拠を問うということは、言語研究の目的そのものを問うことに等しい。言語が認知の反映であり、言語学は認知科学だと叫ばれて久しいが、本当に人間の認知に迫る手続を踏んでいるのかどうか、考え直す必要があるだろう。

言語学者が言語学についてずっと知りたいと思っていた
(けど恥ずかしくて聞けなかった) 2、3 のこと
— 言語学は何を研究する学問か —

酒井智宏

言語学の教科書は、言語学とは人間の心を研究する科学、すなわち認知科学であると謳ってきた。言語は人間による世界認識の反映であり、言語を研究することで人間の心の本質に迫るのが言語学の究極の目的なのである。だが、いったい、言語とは誰の何の認識の反映なのか。

日本語では太陽の色は赤であり、フランス語では *jaune* である。言語が人間による世界認識の反映であるとする、日本人とフランス人は太陽の色を異なる色として認識していることになる。しかし、ここから「日本語には単複の区別がないから、日本人は一つの机と複数の机の違いを認識していない」といった暴論まではもう一步である。こうして、「言語 = 世界認識の反映」という図式は早くもほころびを見せ始める。

言語学では、「言葉は液体である」といった「深層の比喩」が語られることがある。ここでは、『言葉は液体である』と考えると言語現象が整合的に説明できる」という事実から自動的に「母語話者は無意識のうちに『言葉は液体である』と思っている」という結論が導き出されている。こうして言語学者は「無意識の信念」のような心理的実在性の欠如した心的概念の存在にコミットしていくことになる。

その最たるものが、メンタル・スペースに代表される心的表示である。フランス語では、前過去は大過去と違って「過去の過去」を表すことができない。メンタル・スペース理論はこれを次のように「説明」する。「形態上の大過去と前過去の違いは助動詞部分が半過去であるか単純過去であるかであり、半過去と単純過去の意味素性の違いは前者が PAST IMPERFECTIVE、後者が PAST PERFECTIVE である。PERFECTIVE だと定義により、V-POINT は EVENT 位置に移動することができない。(…) そのため S2 から S3 に対して PERFECTIVE な PAST の認定ができず、結果として PAST + PAST を表現することができない、ということである。」(井元秀剛『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』、ひつじ書房、2010 年) いったい何を言われているのかさっぱり分からない。こうした難解な意味表示は心理的実在性を決定的に欠いており、その実在が脳科学によって実証されることはおそらく将来的にもない。また、難解な心的表示を読み取る主体としてホムンクルス(脳の中の小人)を仮定せざるをえない。

かくして、「言語学は人間の心を研究する科学である」という言語学者のかけ声は虚しいだけのものとなる。言語学は何の哲学的反省もなく正体不明の心的概念を次々と仮定しているに過ぎない。その結果、教科書文法・学校文法で

十分理解できることを、わざわざ難解な理論言語に言い換えているに過ぎない。

言語学についての哲学的考察序説

山口裕之

言語学は何を研究する学問か：「言語学」という言葉の初出は1837年である。その母体としては、19世紀の比較言語学と古代ギリシア以来の文法理論がある。前者は、サンスクリット語とヨーロッパ諸語の類縁関係から「祖語」を推定することを主要な問題関心としていた。他方、文法理論は言語教育のための手段として考え出されたが、17世紀には、普遍的な思考の構造に即した普遍文法理論が考案された。こうした近代哲学における文法理論が、普遍性を志向する現代言語学につながっている。

「認識」とは何か？：近代哲学では、無秩序な与件である「感覚」が秩序付けられることで「知覚」になる、それがそのまま「意味」である、というような認識論が語られた。これは「サピア・ウォーフの仮説」などにつながる発想である。

しかし、日常的な経験において我々は決して「無秩序な感覚与件」など見ることはない。与えられるのは常にすでに秩序ある「知覚」である。実際、Berlin & Kay, *Basic Color Terms* などによって、諸言語における色彩知覚と色名の普遍性が示されている。

そこで、知覚の普遍性と概念（意味）の設定の恣意性との間の整合性が問題になるが、概念に恣意性が入り込みうるのは、「意味」が一般性、すなわち他の個物との同一性だからである。同一性の尺度は観点によって変化しうる。要するに、知覚とは個別的なものであり、意味とは一般的なものであって、両者は峻別すべきなのである。

分類の諸相：分類（意味の設定）は恣意的なものか自然的なものかが、分類学や博物学において問題となってきた。そこで、ある分類が「より自然」であり、より対象そのものに即したものであると思える条件を考えるなら、より自然な分類とは、分類の尺度に理論的背景があり、複数の現象が、そうした分類から一貫して説明できるような分類である。こうした観点から言語学における分類の妥当性を問い直すことが必要であろう。

言語学における「説明」の構造：近代哲学の普遍文法理論を引き継いだ現代の諸理論も、言語を何らかの普遍的な思考の構造から説明するという理論構成を取ることが多い。問題は、そうした「普遍的な思考の構造」が実在するかどうかである。

近年の認知科学では、仮定された理論モデルによって現象がうまく説明できれば、翻って理論の実在性が保証されると考える。とはいえ、ある理論が「正

しい」ことを判定する普遍的な基準を想定することは事実上不可能なので、具体的の一つの理論が「正しい」と言えるかどうかは個別に判断するしかない。分類についてと同様、多産な説明能力があるかどうかの一つの尺度になるだろう。

ヨーロッパ諸学が斬り捨てた問い：言語をめぐる問題で、私が一番根本的だと考えるのは、意味の共有の問題である。概念の恣意性の理論を受け入れるなら、言語は他者に通じず、誰も言語を学ぶことはできないということになってしまう。にもかかわらず言語が通じ、学べるのはなぜか。

この難問に対して、たとえばチョムスキーは、生得的な普遍文法を仮定することで答えようとした。誰しもが生得的に普遍文法を共有しているのであれば共有の問題は解決される、というよりむしろ斬り捨てられてしまう。

このように普遍性を志向することは、理性や論理（ロゴス）の普遍性を理念とする古代ギリシア以来のヨーロッパ思想の特徴ないし特異性である。ロゴスの普遍性が前提ならば、いかにしてそれが共有されるのかは論じる意味がないということになる。しかしながら、意味の共有こそが、言語の本質とも言うべき現象なのである。

私としては、「普遍性」概念を「共有可能性」に、「真理」概念を「有効性」に置き換えることで、西洋思想全体の組み直しを図る必要があると考える。

II 書評

髭郁彦他編著『フランス語学小事典』、駿河台出版社、2011年

評者：鈴木隆芳（大阪経済大学）

昨今の言語学は元気がない。この放言にただちに賛同頂けなくても、20世紀前半のかつて構造言語学が隆盛なりし頃と比べての話なら、多少の共感を得られるのではないか。本書は、そんな言語学受難のご時世に執筆された事典である。執筆陣の胸中にあっただのは、前途洋々な学問分野で一旗揚げてやろうという暢気な野心ではないだろう。むしろ、今やらねば取り返しのつかないことになるという危機感であったと思う。この斜陽の学問分野において中興の祖たれ、という気概がそこには見てとれるのである。

作成にあたっては、本書の編著者3名によって2010年に出版された『フランス語学概論』の記述を最大限に生かすと記されている。とはいえ、新たに3

名の著者を加え、フランス語学、言語学の枠を超えた事項までも取り上げる本書は、それとは別の様相を呈している。前書が、授業での使用を念頭においた教科書としての性質を色濃く持つものであるのに対して、本書は、言語に関することならなんでも受けて立とう、という無差別かつ普遍的な境地に踏み込んだものである。

そうした中でも執筆陣の理念は一貫している。安易な簡略化を退け、学生、教員の双方にとって意味のあるものを作る、という指針にはぶれがない。そのため、項目によっては、初学者が自ずと理解することが難しいものもある。そればかりか、時には愕然とするようなことさえ書いてある。簡単な答えを期待したはずなのに、ふたを開けてみれば、難解な問いが顔をのぞかせるのである。「記号」、「対話」、「テキスト」、「表現」等、一見なんでもないようなものが、この学問では手強いことを思い知るであろう。

驚愕（ワンダー）ではなく、共感（シンパシー）ばかりが求められるようになってしまった。本物の詩が読まれない現状について、ある現代歌人が言った言葉が去来する。「わからないもの」におぞましきすら覚え、すぐに理解できるもの、即効性のあるものばかりが求められる。あげくの果てには、今の自分が認められる世界だけがあればいいという鬱屈した願いさえ抱く。そんな心性を少なからず共有する学生と向き合うにあたって、本書の執筆陣は決して迎合はしないはずだ。それが共倒れであることなど、彼らはとうに見抜いている。むしろ、まずはナゾに驚愕させ、この世界がそう簡単には見渡せないほどの奥行きをもっていることを知らしめる。そうした教師としての資質がここでは発揮されている。

関連語彙の掲載、200名もの著名学者の紹介、仏和対照表、参考文献等、どれも入念に作成されていて重宝する。また、各項目についても、フランス語学、言語学を主としながらも、今までの事典よりもはるかに守備範囲が広い。既存の語彙に説明を上塗りするのではなく、なんらかの問題意識が発生するなら、それこそを項目として取り上げるべきだ、という虚心坦懐な吟味があったことは想像に難くない。各項目は、いずれもが一文による簡潔な説明からはじまる。ために「意味」という項目を引くと、「言語表現が表している」とされるもの」という定義がまずある。「表している」と断言するのではなく、「表しているとされる」という含むところがある言い回しも行き届いていて好感が持てた。その後、構造意味論、論理の意味論、認知意味論、言語行為論の立場からの客観的な概説が続く。

ただ、「意味」などという項目を嬉々として引くのは、そうとうに意地が悪い。言語を扱う分野には、この「意味」と同様に、答えがあり過ぎてどうにも定義できない現象が多々ある。私たちの見方しだいで、ころころ姿を変える事象こ

そが言語の本質を成しているからである。それでも、数理的・物理的事象とのアナロジーで捕らえるなら、言語は従順で扱い易い対象にとどまる。ここでいう扱い易さとは、「いつも同じものが目の前にある」という物質一般が示す恒常性のことである。このアナロジーが破綻しなければ、言語学はいつまでも無邪気な青春時代を謳歌できた。この学問に自然科学と同様の漸進的發展を望めると、そう希望を抱くことができたからである。しかし、「意味」に代表される心的事象と対峙するや否や、言語は幻想としての本性をあらわにする。そして、こうした存在様態についての問いがひとたび頭をもたげてくると、おとなしくじっとしていたはずの対象は豹変し、捕らえようもないほど揺らぎだす。幻想を相手にするのだから、前進も後退もなければ、スタートもゴールもない。前後不覚のまま、ただ「動いている」、「変化している」という感覚だけが、當為の実感として残るだけだ。この学問において、更新、刷新、解体、脱構築という語彙で「進歩」が語られるのもそれゆえのことである。

おそらく執筆陣はこうした言語（学）の性質をそれぞれの思いで受け止めていると思う。記述に見られる妙味の源泉はきっとそこにある。無責任な言い方かもしれないが、ここで私がうまく言えなかったことは、この事典に明確な言葉で記されている。そこを見てもらえばよい。通読してみると、いわゆる事典の読後感には収まらない感想を得た。言語学は役割を終えていない、という彼らの言葉を信じる気になった。

Yumi TAKAGAKI (高垣由美), *De la rhétorique contrastive à la linguistique textuelle : l'organisation textuelle du français et du japonais*, Osaka Municipal Universities Press & Publications des Universités de Rouen et du Havre, 2011

評者：阿部宏（東北大学）

日本語とフランス語について文体論、言語学、語学教育的観点など多様な側面から対照研究を試みた本書は、フランス語学・日仏対照言語学・フランス語教育の専門家である高垣由美氏（大阪府立大学）が2008年にルーアン大学に提出した博士論文を著書として纏めたものである。

全体は、日仏の文章構成の特徴を比較した第一部とよりミクロな言語学的考察に関わる第二部で構成されているが、いずれも分析は著者のフランス語教師としての実践的経験、多種多様な日仏間の翻訳文献の具体的検討に基づいた記述になっており、作例の単文から抽象的理論化に向かう研究が多い中で、本書は新鮮な驚きと発見に満ちた内容であった。語学教育の現場への言及、オリジ

ナルと翻訳の緻密な比較、あるいはまた言語現象について文脈を広くとったテキストレベルでの考察が、魅力ある研究領域であることをあらためて認識させられた思いである。

第一部では、日本人学生のフランス語作文や坂口安吾、小林秀雄などの日本の随筆のフランス語訳の分析をつうじて、「導入-展開-結論」型を重視するフランス人と、論理の漸進的發展ではなくむしろ飛躍を繰り返しながら収束していく「起承転結」型の影響を受けた日本人との文章構成に対する根本的な認識の相違が指摘される。

ここで象徴的に興味深い例は、日本人学生の手紙での *à propos* の不自然な使用例である。日本人にとって手紙は時候の挨拶などの前置きの後に本題に入るが、この挨拶から本題への移行時に「ところで」は全く自然であり、日本人はフランス語の手紙においても *à propos* を用いてしまう。しかし、*une idée qui surgit brusquement à l'esprit* を述べるだけの *à propos* の使用はフランス人にとっではきわめて奇妙に感じられるのである。

小論文において何が重要であるか？ というアンケート項目の一つ「著者の意見が明確に述べられていること」に対する評価として、この点が非常に重要であるとするフランス人 26% に対し、日本人は 73% である。会話においては意見をはっきり述べることを遠慮する *timide* な日本人像とは正反対な結果であるが、ここには戦前戦中への反動から作文においては個性重視、型を意識しない自由な感性の発露がむしろ奨励されるようになってきたといった事情が反映してはいないだろうか？ 日仏の文章構成の相違には、文化的伝統に深く根ざした部分とはまた別に、この種の比較的歴史の浅い原因が重なり合っているのかもしれない。

第二部においては、日本語に比較しフランス語においては、接続詞などによりテキストの一貫性が示される、代名詞などにより指示対象が厳密に示される、各文の自立性が高い、逆に日本語においては、発話者への参照が示される、発話者が状況に内在的である、などの特徴が指摘された。

発話者については、三島由紀夫の『潮騒』の一節「母親は(…)速達で葉書をよこすなんて勿体ない(…)」と言ってぶつぶつ怒った。」とそのフランス語訳の *sa mère bougonna en disant qu'envoyer une carte par exprès était du gaspillage ...* が対照されている。「よこす」とは発話者(=母親)の方への移動を含む、いわゆる指呼的な表現であるのに対し、*envoyer* はそうではない。この日仏の違いは、フランス語では動詞一語で表す事態について、日本語では「出ていった」、「入ってきた」、「悲しみは徐々に消えていった」、「その思いが湧き上がってきた」など、具体的な移動に限らず本動詞に補助動詞「いく」と「くる」が高頻度で付加されることと平行した現象といえよう。日本語では、事態は基準点としての発話者との関わりにおいて提示されるのである(「なんて」という発話者の主

観的判断(=事態への「望ましくなさ」)をあらわす表現がやはりフランス語訳されていない点も、興味深い。

また「いく」、「くる」の本動詞としての使用においては、日本語では相手のところへの移動は「わたしはあなたの所へいく」であるのに対し、フランス語では相手を基準にして *Je viendrais chez vous.* となることから、日本語では「1人称 vs. 2・3人称」であるのに対し、フランス語では「1・2人称 vs. 3人称」という区分であることが指摘された。しかし、日本語の一部の方言にはこのフランス語的な相手指向の「くる」の用法があり、これは古代語の用法に起源があることをも考え合わせると、「主観性 → 間主観性」という最近指摘される意味変化の方向性とこの日本語の通時的現象とはどのように折り返わせることができるのだろうか？ 興味深い問題点が指摘されたように思う。

以上、比較文化論的考察からマイクロな言語現象までも射程に入れた示唆に富む内容である。また、本書は海外での流通を前提としたフランスの出版社との共同出版であり、注や本文においても、外国人読者を想定した日本文化や日本語表現に関するきめ細かな配慮が行き届いている。日本におけるフランス語学、フランス文学研究は層も厚くレベルも高いが、本書の出版形態は日本人研究者が今後とるべき方向性を示唆するものでもあろう。

村田京子『女がペンを執る時 19世紀フランス・女性職業作家の誕生』、新評論、2011年

評者：高岡尚子（奈良女子大学）

第二派フェミニズム運動の流れを受けて誕生したフェミニズム文学批評は、女性の立場から男性作家の作品を読み直すフェミニスト批評を出発点に、女性として書くことの意味を追求し、それまで不当な評価に甘んじることを余儀なくされてきた女性作家を掘り起こして論じるガイノ批評へと展開して行った。19世紀フランスにおいて、女性が職業作家となる志を持ち、実現していく過程を扱った本書は、「女がペンを執る時」、すなわち「女性が書く」という行為に注目し、文学史上ほとんど顧みられることのなかった女性作家たちを発掘するという点で、ガイノ批評的な取り組みと重なるところが多いだろう。

著者の村田京子氏はもともとバルザックの専門家であるが、現在はジェンダー研究に力を注ぎ、同時代の女性作家ジョルジュ・サンドの作品に関する論考や、19世紀小説に現われる娼婦像を分析した『娼婦の肖像 — ロマン主義的クルチザンヌの系譜』など、「女性が書いたもの」や「女性の書かれ方」に関する研究成果を精力的に発表されている。本書はその流れに乗るもので、「女性が

書く」ということの意味を、これまであまり論じられることのなかったジャンリス夫人、デルフィーヌ・ド・ジラルダン、フロラ・トリスタンという三人の女性の生涯と作品を通じて分析している。

本書はしかし、彼女らの生涯と作品をカタログ的に紹介しているわけでは決していない。冒頭でまず、「*bas-bleu*」という揶揄に満ちた表現や「*femme-auteur*」（「女流作家」）と「*femme-écrivain*」（「女性作家」）の違いなどを示しながら、男性作家からみた女性作家像の特徴を明確にしている点は重要だろう。こうして「書く女性」に対する風当たりの強さが提示されることで、女性たちが経験した困難と、それを乗り越えるために費やしたエネルギーの大きさをより深く理解できるからである。

続く第二部では、七月革命によって王位に就くことになるルイ＝フィリップの養育掛という高い地位にあったジャンリス夫人が、革命の嵐に翻弄されながら職業作家として家計を支えるため、作品を次々と発表する姿が詳細に語られる。女子教育を含む彼女の教育論は非常にユニークかつ先進的であり、見るべき点も多いが、文学作品に与えられた道徳性の強さから批判を受け、19世紀後半にはその輝きを失ってしまった。その読み直しは、近年になってようやく始まったばかりであると言う。

第三部では、美貌と才気でサロンに売り出され、ロマン派のミューズと讃えられたデルフィーヌ・ゲイが、新聞王エミール・ド・ジラルダンの妻となり、ジャーナリストへと転身するさまが語られる。夫の発行する『ラ・プレス』紙に、ローネイ子爵という男性筆名で連載した「パリ通信」は大人気となり、高い評価を受ける。二月革命の際、拘束された夫を擁護すべく実名で書いた政治的発言に対して激しい攻撃を受けたため、デルフィーヌはジャーナリストとしての活動は止めるが、晩年に至るまで戯曲などの執筆を続けたのであった。

第四部で取り上げられるのは、『労働者連合』の著者フロラ・トリスタンである。ペルーの大貴族を父としながら、フランスの貧しい労働者家庭に育ったフロラは、自らを「パリア」と位置づけ、同じように社会から疎外されている女性や労働者たちの解放を目指す。一般に、社会運動家として知られるフロラ・トリスタンだが、ペルーへの旅の経緯と見聞を本名で発表した旅行記『ある女パリアの遍歴』や、当時のイギリス社会の暗部を切り取った『ロンドン散策』などに見られる独自の視点からの社会分析には、文筆家としての優れた才能が発揮されていると言えるだろう。

フェミニズム批評には、その後ジェンダーの視点が導入されることにより、ジェンダー批評やクィア批評へとさらなる地平が切り開かれてきた。しかし、これらの批評方法は決して一方向へと不可逆的な形で「進化」しているのではない。本書が扱っている三人の女性はそれぞれ貴族・ブルジョワ・労働者階級という異なった社会階層に属しているが、文筆活動という点で共通している

と同時に、死後の忘却という経験も共有している。このような運命をたどった女性作家はまた、彼女たちが最後ではない。忘却からの発掘と正当な評価を与える取り組みは、多くの書物や女性作家たちがその対象となるのを待っているのである。本書の試みは、そうした意味合いからも高く評価されるべきであろう。

バンジャマン・コンスタン（高藤冬武訳）『バンジャマン・コンスタン日記』、九州大学出版会、2011年

評者：倉方健作（東京理科大学）

「まずひとつの驚きから出発できる。バンジャマン・コンスタン（1767-1830）は何ゆえにフランス文学の歴史において当然彼が占めるべき地位を占めていないのかという驚きである」。ツヴェタン・トドロフによる『バンジャマン・コンスタン 民主主義への情熱』はこのように始まる。しかし実際には、この「驚き」を十全に共有するための道程はかなり険しい。1957年刊行のプレイヤー版『著作集』の編者は、コンスタンへの無理解の背景として、自伝的小説以外の著作が簡単には手に入らない現状を挙げたが、これは40年後のトドロフも同様に嘆くところであった。こうした状況を打開する『全集』の刊行が1993年に開始されたものの、50巻を超える全巻の完結までにはなお相当の時間が見込まれる。その間に目配りの利いたコンパクトな選集として機能していたプレイヤー版は絶版となって久しく、トドロフの言う「コンスタンの捉え難さ」とは、人物像の把握とコーパスの把握との二重の意味で、なおアクチュアルな問題である。

こうした中で、高藤冬武氏による『バンジャマン・コンスタン日記』の邦訳刊行は、日本におけるコンスタンの受容を大きく好転させるに違いない。「解説」で言われるように、訳出された4種の「日記」（「本日記」、「略日記」、「ギリシャ文字日記」、「アメリーとジェルメーヌ」）は、「文学者、政治家、宗教思想家、艶福家、漁色家」といった様々なプロフィールを持つコンスタンの「全心露出」の著作である。日記が覆う30代後半から50歳にかけてのコンスタンの月日は、政治的動乱のもとで著述家・行動家としての彼の才覚が最も生き生きと発揮されていた時期であり、またスタール夫人と人妻シャルロットの間で煩悶した日々でもあった。そうした観点から「日記」の文体や記述内容の変遷は、『アドルフ』という「虚実皮膜」の心理小説が成立する過程を追う手がかりともなるが、その内容は自伝的小説の副読本としてのみ価値を持つものではない。重層的、多面的なコンスタンの生の軌跡、歴史の雄弁な証言であると同時に

に「人間の魂の入り組んだ迷路にかつて投げ下ろされたもっとも驚くべき測鉛のひとつ」(トドロフ)である「日記」は、それ自体が人間心理への深い洞察に満ちた興味深い読み物となっている。

この『バンジャマン・コンスタン日記』の大きな特徴は、その翻訳文体の選択に見られる。「あとがき」で述べられるように、「創作的翻訳」のプロセスは、まず江戸期の文人政治家が残した日本語の「原著」を仮に想定し、コンスタンの「日記」をその「仏語訳」と見立てることに始まる。それを再び日本語に戻した「反訳」として、『バンジャマン・コンスタン日記』を読者に提供する訳者の大胆な試みは、意外なほどの読みやすさと、一つの人格の確かな現前をもって達成を見たように思われる。「擬古文体のリズムを訳文の基調とし現代日本語文に転調」した訳文は、曲亭馬琴と同年に生まれたコンスタン自身があたかも髻を結っているかのような過度な言語遊戯に陥ることなく、日記の簡潔な記述を文学性を保ちながら日本語に移すことに一定の効果を挙げている。

巻末の「人名初出一覧」は原綴と生没年も付し大いに役立つが、登場箇所の全てを網羅した「人名索引」ではないため、総登場回数およびコンスタンにおける重要度を知るための手軽なツールとはならない。また、コンスタンが「日記」の中で挙げる幅広い文学書、思想書の索引があれば、同時代の受容や影響関係を概観する上で有用かとも思われたが、こうした欲を言い出せばきりが無い。そもそも「一つの文学作品として読まれるべく」世に問われた本書を、事典や目録のように用いようというのは心得違いだろう。注釈を傍注ではなく割注として本文に組み込んだことも、「読書の流れが中断されぬよう」訳者によって施された配慮であった。700 ページを超える大部ではあるが、まず通読を勧めたい。

翻訳はプレイヤード版を底本としつつ、その後半世紀の研究を反映した『全集』の内容を存分に取り込み、かつ両版の異同については訳者が直筆原稿にあたって検討、その都度注釈を加えている。なおプレイヤードでは「日記」の一部として扱われている「アメリーとジェルメーヌ」は『全集』では「創作」に分類されており、2011年には『セシル』、『赤い手帖』と併せた1冊の「自伝的小説集」としてGF-Dossierのコレクションに加わっていることを付記しておく。

「コンスタンの文章邦訳は文語体を措いてなし」という確信を抱いて「日記」と取り組んだ訳者が「凡そ二十年の共生」の末に実現させた『バンジャマン・コンスタン日記』は、確かに「創作的翻訳」と呼ぶに相応しい。そこには研究者としての作家観、時代観、作品解釈に加え、一人の日本語文章家としての技量もまた濃密に溶け込んでいる。捉え難きコンスタンを同じく捉えようと試みる多くの研究者の反応が待たれる力作である。

評者：小黒昌文（駒澤大学）

『失われた時を求めて』を、まずは十全に生きなければならない。

水のイメージをめぐる卓越したテーマ批評を繰り広げ（*L'image de l'eau dans A la recherche du temps perdu : fonctionnement et évolution*, 1978）、さらには「象牙の塔」の閉塞とは無縁なプルーストの「開かれた世界」の相貌を詳らかにした著者は（『マルセル・プルースト『失われた時を求めて』の開かれた世界』、1999年）、作家の言説に溶かし込まれた「呼び交わすような息遣い」に耳を澄まし、彼方から響きわたる作家の〈声〉を丁寧に掬いあげてきた。「交響する小説」と銘打たれた新たな書物もまた、揺るぎないこの姿勢に裏打ちされた、豊穡な変奏曲である。

筆者は、プルーストが圧倒的な構成力のもとにちりばめたライトモチーフをつぶさに拾いあげ、密やかだが消えることなく作品を支え続ける通奏低音をひとつひとつ浮かび上がらせてゆく。そして、虚心に作品と向き合い、感覚や事物のざわめきが奏でる旋律に身を委ねる幸福を知りながらもなお、著者の眼差しはその先にある新たな地平へと向けられる。なによりも大切なのは、他者や外界からの呼びかけに対して自らを開き、「ただ受信を繰り返すだけでなく、それと共振し、最後に主体となって発信しよう」とすることなのだ。著者が「主体的な再創造」あるいは「創造的受容」と名づけるこの営為が、作家を志す「私」の精神的成長と不可分であることが、本著のきめ細かい読解によって解き明かされてゆく。

アトリエで目にした革新的な海洋画や、作り手の生が刻印された小楽節の音色、フェルメールの筆致に理想をみた作家が残した言葉。日曜日の食卓で口にする手の込んだ料理や、嫉妬の対象を包みこむ一着のドレス、街路に響く物売りの声。そのいずれもがそれぞれの「章句」と「抑揚」を湛えた旋律を奏で、互いに交錯することで壮大な「交響楽」を編み上げている。小説家としての〈声〉は、その調べに導かれるようにして獲得されるのだ。

眠れぬ夜に本を読んでくれた母の声も、電話口の彼方から聞こえてくる祖母の声も、あるいは死の床に横たわる彼女の断続的な呼吸も、「私」のうちに響き続ける。みずからの身体を通すことで作品に新たな生命を与える母の朗読は「創造的受容」の原体験であった。〈口うつし〉にその滋養をうけとる息子は、親鳥が咀嚼した食物をもとめる雛のようにしてそれを吸収し、さらには自分の〈声〉で歌うための糧として昇華させることになる。病の進行とともに冥府のエウリュディケや詩神アポロンといった神話的相貌を付与されてゆく祖母の声は、生

と死のあわいに響き、直線的な時間の流れを超えて主人公のうちに回帰する。

特筆すべきなのは、「交響する小説」という主題の射程が、作品の内的読解に限定されることがない点である。書物全体の倍音となるのは、『失われた時を求めて』と読者が切り結ぶべき関係をめぐる思索であり、作品の〈声〉をいかにして受け止め、いかに応えることができるのかという、根源的な問いである。

あらゆる芸術作品との対峙は、受動的な営みに終始すべきではない。芸術家にとっての〈死後の生〉とは、忘却にあらがう名声や、その名声に支えられた「作品固有の永続性」ではなく、みずからの死を受け入れ、残される作品の生とその〈絶えざる生成〉を後生へと託すことである。著者が指摘するように、作品と出会った者のうちに芽生えるのは「未来へと向かう能動的な営為」への欲求であり、問題にするべきなのは「忘却と喪失へ向かう時間」と交錯するようにして立ち上がる「創造へ向かおうとするもう一つの試み」なのだ。それは「木霊が木霊を呼ぶようにして、生気に富む揺るぎない多声の交響」を実現する声でもある。

追求すべきは作品との協働であり、作家の呼びかけに対する真摯な応答なのだ。マネの「草上の昼食」から著者が喚起するイメージが美しい。画幅のむこうから投げかけられる女性の微笑みは鑑賞者への「呼びかけ」であり、「私たちを宴に招き、絵のなかの昼食に加わるように誘っているかのよう」なその眼差しは「新たな精神活動への招宴でありつづけている」。作品の生と美は完結して存在するのではなく、鑑賞者＝読者がその「宴」に加わることで初めて十全な輝きを放つのだ。

本書は、そうした理論的な展望であると同時に、その創造的な実践でもあるという、優れてブルースト的な構造となっている。だからこそ、本書をしめくくする一文は、読後の一步を踏みだす私たちのうちに、深く響きわたるのである。

作品と私たちのあいだには、豊かな出会いがはじまろうとしている。

ひとつの到達点は、未来へと開かれた新たな出発点となる。私たちは「豊かな出会い」の果実としての本書に触れることでそれを体験し、ブルーストの声に共鳴する著者の言葉によって、新たな読書のほうへと、書くことの新たな実践のほうへと、のびやかに誘われてゆくのである。

評者：門間広明（早稲田大学）

本書は、著者が2007年にパリ第7大学に提出した博士論文を元にした著作である。本書の論述は、ブランシヨにおけるイメージの思考を端的に要約するものとして、ブランシヨ自身のものではない「ミニマル・イメージ」という言葉を採用し、その意味するところを次第に明らかにしつつ展開されてゆく。この言葉の由来の一つは「ミニマル・アート」である。また結論部では、ブランシヨの思考を「ブランシヨが知ることもできなかったような現代芸術にまで」拡大することが提案されている。しかしこうした事実から、本書があえてブランシヨのマイナーな部分に光を当てた試み、あるいはブランシヨ思想の他分野への応用の試みであると早合点してはならない。本書ではたしかにブランシヨ思想の応用可能性が探られているが、主眼はあくまでブランシヨのテキストの精密な読解にある。また本書が取り組んでいるのは、（最初はそうした印象を受けるかもしれないが）決してブランシヨのマイナーな側面ではない。それどころか、著者がブランシヨのものではない「ミニマル・イメージ」という言葉で名指すものこそが、まぎれもなくブランシヨ思想のハードコアであることを、本書を読んだ誰もが深く納得することだろう。

本書では、ブランシヨのテキストの背後に暗黙裡に前提されている言説を探り当て（とりわけ必ずしも明確に名指されない論敵の姿を浮かび上がらせ）、それによってブランシヨの議論が置かれていた同時代的な文脈を再構成するという作業が丁寧に行われている。かつて、ブランシヨの思想はいたずらに孤立させられ、ゆえに神秘化されてしまう傾向があった。本書はそのような傾向に真っ向から抗うように、ブランシヨのテキストを他のさまざまな言説と突き合わせ、それらの錯綜した関係を丹念に解きほぐしてゆく。しかしそれは、ブランシヨの思考を外部の文脈に還元することではなく、そうした作業を通じてこそブランシヨの特異性が逆照射され、より鮮明に立ち現れてくるのである。本書はそのような作業を文学研究として誠実な手続きを踏んで行っており、またおそらく世界初と思われるソースの指摘を多数含むという意味でも貴重である。しかし何よりも、その作業を通じてブランシヨ思想の特異性が析出されてゆく過程そのものがスリリングである。本書はブランシヨについての専門的な研究書であるが、著者の論述の進め方は丁寧で、ブランシヨに親しんでいない読者でも十分にこのスリルを味わうことができるだろう。

前述のように、本書ではブランシヨの思考を現代芸術の分野へと接続するこ

とが提案されている。しかし、そのこと自体に本書の意義があるわけではない。実際、ブランシヨのイメージ論を援用した美術論は今日ではとくに珍しいわけではないし（世界に先駆けてそのような試みを行い、それを魅惑的なテキストへと昇華させた宮川淳の名はここで思い起こしておくべきだろうが）、ブランシヨが語っている純粹なイメージ、すなわち何ものにも送り返されない対象なきイメージという発想は、少なくとも表面的に受け取られるなら、ある種の現代的なクリシェにきわめて近い。したがって、むしろ安易な応用をこそ警戒しなければならぬ。この点からすれば、本書の意義はむしろ、ブランシヨ自身のテキストから、そのような安易な応用を色褪せさせてしまう理論的強度を引き出している点にある。本書はいわば、ブランシヨ思想の応用を真に生産的なものにするための綿密な準備作業なのである。ここでその内容を詳しく紹介する余裕はないが、一言だけ触れておけば、ブランシヨが（そしてレヴィナスが）提示する対象なきイメージは、決して「対象なき」という否定的規定で汲み尽くされてしまうものではなく、「世界において対象が存在する前提として存在する」（p.92）ものであることが、説得的に示されている。

結論の末尾で、著者はブランシヨの思考を「反-偶像破壊的な思考」と呼んでいる。読者はここで、本書が一貫して描き出してきたのがこうした反-偶像破壊主義者としてのブランシヨ像であることに、あらためて気づかされる（そしてこの点において、ブランシヨはレヴィナスの思考から離れる）。しかし、このブランシヨの反-偶像破壊主義を単なる偶像崇拜から厳密に区別しなければならない。反-偶像破壊主義者ブランシヨは、イメージが喚起する不安を、その危険性を、誰にもまして、ときに偶像破壊主義者と誤解されてしまうほど深く認識しながら（序論で述べられているように、実際にブランシヨはそのような誤解にさらされてきた）、同時にイメージの不可避性を、そして何よりもその魅惑を、誰よりもよく知っていた。本書が提示するのはそのようなブランシヨ像であり、そして本書を読み終えた読者は、これこそまさしくブランシヨである、と深く確信するに至るのである。

書評対象本推薦のお願い

日本フランス語フランス文学会では学会広報誌 **cahier** および学会ウェブサイトにて公開する書評作成にあたり、広く対象となる本を募集しています。つきましては、下記の要領により、書評対象として相応しいと思われる本をご推薦いただければ幸いです。

なお、ご推薦いただいた本は資料調査委員会で集計し、書評する本を決定させていただきますので、必ずしもご推薦いただいた本の全てが書評されるわけではありません。

◇目的

日本におけるフランス語、フランス文学研究の成果を収集し、権威付けされた書評ではなく、内容紹介的な書評により公開する。

◇書評の対象

原則として、過去1年間に刊行され、その内容から広く紹介するに相応しい学会員による著書を対象とする。翻訳なども含み、日本で刊行された著書には限らない。フランス文化、映画などに関する著書も排除はしない。

◇推薦要領

学会員による他薦を原則とします。著者名・書名・出版社名・発行年月を明記の上、紹介文(200字程度)を付してください。著作のみの送付については対応しかねますので、ご遠慮ください。

◇締め切り 毎年3月・9月末日

◇宛先 日本フランス語フランス文学会資料調査委員会までメールでお送りください：cahier_sjllf@yahoo.co.jp

cahier 09

編集 資料調査委員会

発行日：2012年3月10日

日本フランス語フランス文学会

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館 505

TEL:03-3443-6671 FAX:03-3443-6672